

図画工作・美術科における 思考力・判断力・表現力

本学校園の図画工作・美術科では、「豊かな造形体験を活かし、自分らしい表現を追求する図画工作・美術」を目標に、これまで自己や他者の思いを掴み、伝え合うかかわり合いの中で、より豊かな表現を追求していく授業づくりに取り組んできた。

今回の学習指導要領改訂における全教科に通底する目標の一つに、言語活動の充実が挙げられ、そのための「思考力・判断力・表現力の育成」の重要性が説かれている。このことは各教科等を貫く重要な改善の要点である。特に美術領域では鑑賞や、それに伴う言語活動の指導の充実が求められている。児童・生徒が自分たちの制作した作品や美術作品等の対象を鑑賞し、感じ取ったことや考えたことを話し合う過程の中で、自分の考えをより深め、自分なりの意味を見出す過程は、問題を発見し、その解決に向かって思考・判断・表現する能動的な学習として、言語活動の充実という当該目標に合致したものである。

特に、美術鑑賞のダイナミズムを理解する上でもアート・リテラシー（アートに関する解釈・批評能力）を獲得することは、芸術を介したコミュニティーを礎に、成熟した社会の構成員として、将来的に、児童・生徒が互恵的・互助的な関係を構築する「生きる力」となり、人生を豊かなものとすることができるであろう。しかし、現在の児童・生徒に、作品の内容を自分自身の解釈で表現、説明する等、美術に関する知識を活用して作品全体をとらえる思考・判断力を獲得する学習機会が充分ではないのが現状である。自分の考えを他人に説明する「言語力」などの表現力全般や、習得した知識・技能を活用して物事の全体を構想する思考・判断力などが不足していることは、文部科学省の全国学力・学習状況調査の結果などから分析されており、美術の授業でも思考力、判断力、表現力の育成が一層求められている。

美術における思考力や判断力、表現力が児童・生徒に充分備わっていない一因としては、児童・生徒が「美について語る」のは、ある種気恥ずかしさを感じるからではないだろうか。その原因としては日本の教育全般が受験勉強と同様に、早く、正確に「正解」することを目標としたもので、自分の解釈が他の児童・生徒と違う、あるいは先生の「答え」と違っていたら、それは、「個性的」ではなく「不正解」で、恥ずべきことであると児童・生徒が感じることに起因しているであろう。しかし、鑑賞領域において、作品の意味や価値は教師が一方的、画一的に指導する「絶対的」なものではなく、自分なりの意味や価値を児童・生徒がお互いに批評し合う過程における、双方向的な言語活動を通じた、学び合いの中で獲得していくものである。

美術の鑑賞とは「正解」を記憶する学習でなく「行動し、発見し、感じ、自分の心に起きた事を説明する」という根源的な活動そのものなのである。美術、そして世界に関心をもつこと。そして、それによって自分が何を得たのかを表現すること。それこそがアート・リテラシーの本質である。こうしたアート・リテラシーは才能ではなく、教育によって習得可能な能力である。まず「そこに何が見えるか」という単純な問いの繰り返しから出発し、自分の言葉で語るように教師が指導・助言し、児童・生徒達それぞれが「何を感じたか」という思考に到達する過程を経る経験が、教育の場において重要である。

このように抽象的な「思い」を、自分の言葉で表現する方法論を掴むことができたとしたら、児童・生徒にとってのまさしく「生きる力」となる。このような対話型の鑑賞教育の授業は児童・生徒たちの観察力、想像力、注意力、言語表現力、コミュニケーション能力、抽象的・哲学的思考力などを伸長し、美術以外の教科にも良い影響を与えるであろう。

幼小中11年間で系統立てて児童・生徒たちの言語に関する能力を、美術を通じ育成することは、思考力、判断力、表現力やコミュニケーション能力等を育成する点からも重要である。今後は美術科において、児童・生徒が自分の感情や思いを他者に表現できる能力を指導する方法論を確立すべく、コミュニケーション能力の向上のための具体的な指導法の開発・推進を図ることがより一層重要である。その目標を達成する為に美術教科構想の更なるブラッシュアップを図り、様々な実践を展開することにより、児童・生徒たちの「思考力、判断力、表現力」を高める授業の在り方を構築したい。

(共同研究者：島根大学教育学部芸術表現教育講座 藤田 英樹)